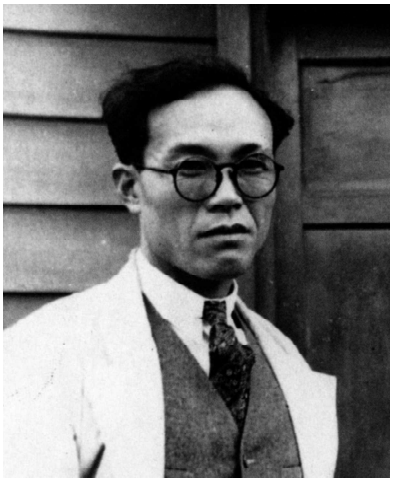
本田宗一郎（ほんだ そういちろう）

技術の世界、ごまかしは許されない
－世界のホンダの礎を築く－

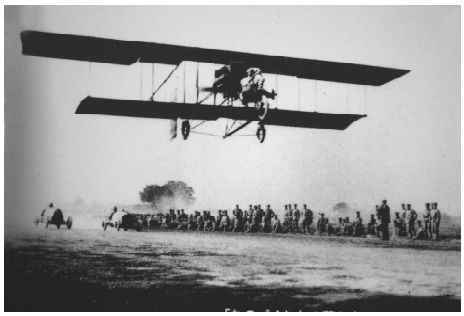


本田宗一郎（1906 ～ 1991）
出典：『ホンダ50年史』

■飛行機と出会った少年

本田宗一郎は、1906(明治39)年に静岡県磐田郡光明村（現:静岡県浜松市天竜区）生まれた。

本田宗一郎は子供の頃から手先が器用でものづくりと機械いじりが大好きな少年でった。8歳の時に村で初めて見た自動車、11歳で浜松まで「アート・スミスの曲芸飛行」を見学へ行き飛行機という乗り物と初めて出会い感銘を受け、1922(大正11)年に東京の「アート商会」へ丁稚奉公をはじめた。

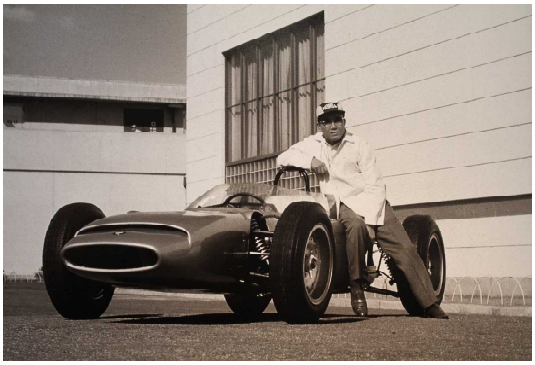


本田宗一郎11歳の時に浜松で見たアート・スミスの曲芸飛行
写真：本田宗一郎ものづくり伝承館蔵

■不可能を可能にするチャレンジ精神

本田宗一郎がレーシングカーづくりにはじめて関わったのは、1923(大正12)年、アート商会のクラブ活動であった。

本田は、独立後もマシンづくりを続け、1936(昭和11)年6月に日本初の本格的サーキット多摩川スピードウェイのオープニングレース「多摩川第一回自動車競走大会」に、弟・弁二郎と「浜松号」で参戦した。ゴール直前で突然コースに出てきた車をよけられず激突、途中リタイアとなった。1954年オートバイレースの世界最高峰であるマン島レースに参加の宣言をしてから5年経った1959年、世界のマン島TTレースでチーム優勝を果たす。 1962年には125cc、250cc、350ccクラスで優勝、ホンダのオートバイはついに世界の頂点に立った。

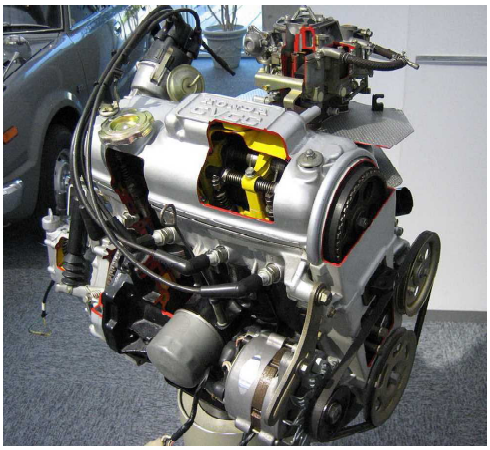


本田宗一郎とＦ１　(1960)
写真：本田宗一郎ものづくり伝承館蔵

本田宗一郎のF1レース参戦の宣言は、1963年でレースへの参加宣言は、多くの人が「参加して勝てる」と思えるような状況ではない時に、決断している。彼の口癖は、「やってみもせんで、何が分かる」ということだった。1964年に初挑戦、3戦に出場した成績はふるわず。翌年の最終メキシコGPで標高が高く他チームも苦しむ中、優勝をするが、1968年にFI休止宣言を出した。

■世界のホンダとなる革新エンジンの開発

昭和40年代、車の排気ガスによる公害が世界中で問題となっていた。レースではエンジン性能の極限までの開発が要求される。それがホンダの若い技術者たちを育てた。レースで鍛えられた彼らが、低公害エンジンの開発に投入された。特に、極限状況でも燃焼効率の良いエンジンを必要とするF1の経験が、他のどんな自動車メーカーよりもエンジンの革新的な燃焼技術をホンダに蓄積させていた。その蓄積が見事に生きたのが、希薄燃焼によって画期的な低公害を実現し、ホンダの小型乗用車を世界の舞台に立たせる原動力となった1972年のCVCCエンジンの開発であった。



ホンダの転機となったCVCCエンジン(1973)
ホンダコレクションホール蔵

その後、公害問題も一区切りがついた1984年、ホンダはF1レース参戦に復帰した。ホンダは、F1レースで勝利を重ね、1988年には全16戦中15勝で全タイトル獲得、長年抱き続けた本田宗一郎の夢が現実のものになった。

（二宮健壽）